かげのむま、たけなゝきばかり、〇略下

〔宇治拾遺物語七〕今は昔小野宮殿〇實頼藤原の大饗に、〇略中引出物の馬を引立て有けるが、〇略中黑く毛なる馬のたけ八き餘りばかりなる、ひらに見ゆるまで身ふとくこえたる、〇略下

〔詞花和歌集三秋〕駒迎をよめる　大藏卿匡房

あふさかの杉間の月のなかりせばいくきのこまといかでしらまし

〔康富記〕嘉吉二年十二月十三日庚子、是日室町殿孝經被遊、終淸外史被下御馬黑鹿毛四寸ハナリ御大刀黑作金脛也祝著被畏申之、

〔世事百談〕馬の丈四尺を定尺とし、それよりあまれば、一寸より三寸までをスンといひ、四寸より七寸までをば、寸といはず、キといひ、又八寸より九寸までを、又スンといへるよし今の馬乘人はいへど、そはいつ頃より定りたる詞にか、むかしは幾寸にても、なべてキとのみとなへたり、〇略中私云、馬は四尺を馬たけといふを、それに一寸まさりたるをば一きとし、八寸まさりたるをばやきといふなりと見えたり、幸若の舞の高館志田などの詞に、名馬のことをいひて、さんのへだちのしらあしげ、七き、八ぶんあけ、六さいにひきよせ、ゆらりとのつたりけりといへり、この七き八ぶんは七寸八分なり、幾寸にてもキといへることの證とすべし、おもふに寸をキとよめることは、古事記傳に、寸を伎といふは刻むの意なり、萬葉集に、玉刻春と伎に刻の字を書けるも、その意にて、伎といふぞ、キダ、キザムなどの本語なるといへり、〇略中因に云、錢の壹文の半をきなかといへることは、算勘の詞に、壹文半を壹文五分といへり、そは五分は一寸の半なれば、きなかとはいふなり、寸半の約語なるべし、再びおもふに、たゞ半が五分なれば、きなかとのみいひては、くはしからず、錢の徑りは壹寸なること、開元錢よりの定めにて、吾邦も同じければ、もと尺度よりいでゝ、壹文の半を五分ともきなかともいへるとしるべし、